

『#火星の女王』(2025 年)を NHK 総合で視聴した。原作は『火星の女王』(小川哲著)で、視聴後に併せて読んでみた。NHK の放送 100 年プロジェクトの一環として制作された。著者は東京大学院在学中、数学者・論理学者のアラン・チューリングについて研究した。カンボジアの現代史を絡めた SF 小説『ゲームの王国』で日本 SF 大賞、山本周五郎賞「を受賞。『地図と拳』で山田風太郎賞、直木三十五賞を受賞。

私は SF が苦手である。それなのに興味本位で 4 時間半も視聴してしまった。ドラマでは、スリ・リン、菅田将暉、シム・ウンギョン、宮沢りえ、吉岡秀隆など、実力派が揃う。小説版は 4 人の視点が切り替わる構造になっている。

舞台は 100 年後の人類が移住した火星(人類が火星に移住し 40 年経った 2125 年)。イーロン・マスクが今進めている事業が、100 年後には実現したことになっている。

謎の物体「スピラミン」の発見を契機に、火星と地球の対立、そして火星生まれの盲目の女性 L と地球の惑星間宇宙開発機構(ISDA)職員 A の運命的な恋愛が描かれる。L は地球への観光を夢見ており、A との約束を胸に地球帰還計画に参加しようとする。生物学者 K は火星で「スピラミン」という物質が光速を超えて情報を伝達する可能性を発見した。A は 22 年前に地球で行方不明になった物体を探すよう命じられている。火星は ISDA の統治下にあるが、地球への依存と不平等な取引、そして「地球帰還計画」への不満が高まっていた。

そんな中、L は地球へ向かう直前に拉致される。「スピラミン」の発見と、その物質を巡る地球・火星間の政治的駆け引き、そして L と A の純粋な愛が、人類の未来を揺るがすことにある。ISDA の統治下で揺れる火星社会と、両惑星の人々の欲望と希望が交錯する物語となっている。

この番組は、私の感想とは乖離があり、世間の評価は非常に高いようだ。

1. “未来 SF”でありながら、物語の核は人間の感情と葛藤

舞台は 2125 年・火星移住 40 年後という壮大な設定なのに、描かれるのはとても“人間的な揺らぎ”。

- ・視覚障害を持つ L の不安と希望
- ・地球と火星の間で揺れる A の葛藤
- ・支配する側・される側の緊張
- ・「未知の物体」を前にした人類の恐れと欲望

2. 視覚障害の主人公という挑戦

主人公 L は生まれつき視覚障害を持つ人物。ドラマでも、音、振動、空気の変化など、視覚以外の感覚を丁寧に表現していて、視点の新しさが際立つ。

3. 火星社会のリアリティと政治性

火星には 10 万人が移住し、ISDA が支配する構造。

地球出身者が権力を握り、火星生まれの住民は不満を抱える。

この「植民地的構造」が物語の背景にあり、社会的テーマが濃い。

・支配と反発、格差、アイデンティティ、科学と権力等のテーマが、“社会システムの倫理”や“国家権力の構造”とも響き合う。

4. 未知の物体「スピラミン」の存在が生むミステリー

ドラマの中心には、火星に突如現れた“未知の物体”がある。

・誰が作ったのか、なぜここにあるのか、人類にとって希望か、災厄かという問いが、登場人物の運命を絡めながら徐々に明らかになっていく構造は“歴史事件の謎”や“国家と科学の暗部”に通じる魅力がある。

5. 音楽の存在感

L が音楽好きという設定もあり、劇中の音の扱いが物語と深く結びついている。

評価：★★★★☆☆